

政策評価における データ分析の主な事例

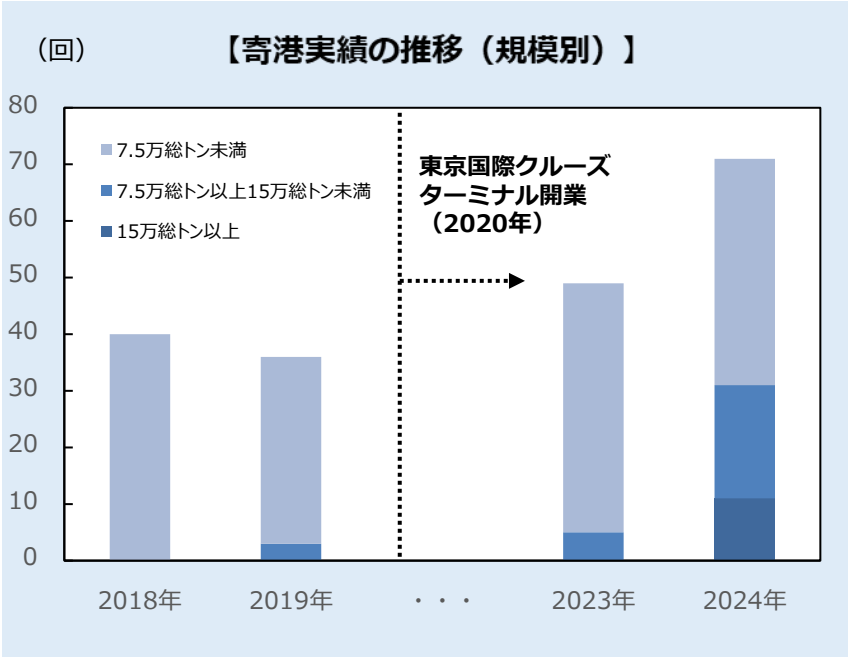
- 政策評価では、目標に対する各事業の効果などを、関連する行政データを活用しながら、分析・評価しています。
- 分析結果を踏まえた上で、事業ユニット全体の方向性を評価し、効果的な事業の構築につなげています。

客船誘致の推進に向けた検証

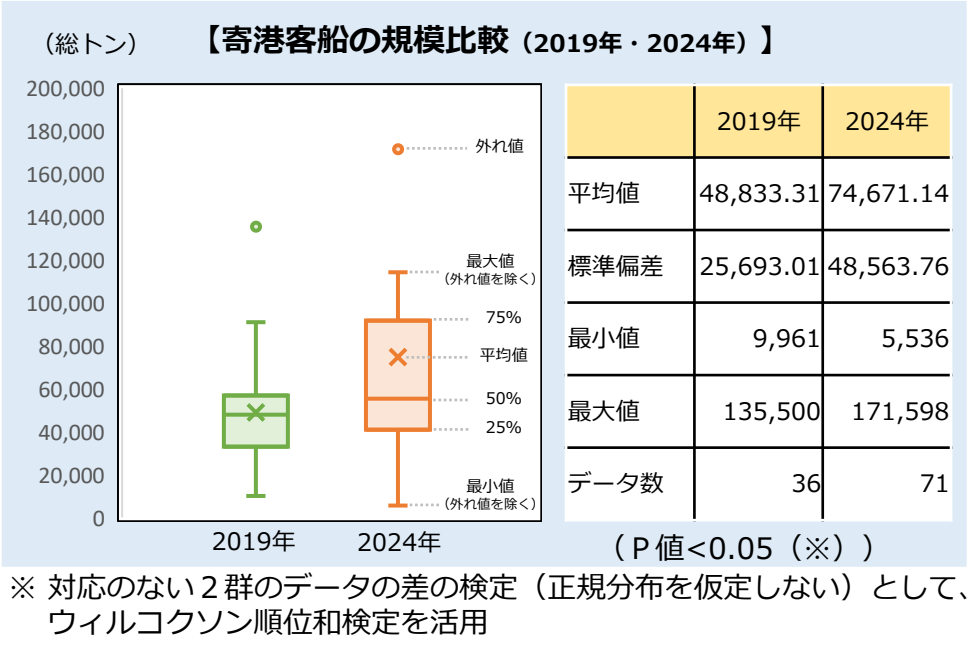
客船誘致の推進（令和6（2024）年度政策評価）

- 背景：世界的なクルーズ需要の増加や、船舶の大型化等により、東京港への寄港ニーズは多様化
- 分析：東京港における近年の客船の寄港実績や規模等を分析
- 取組：大型客船を含む多様なクルーズ需要獲得のため、受入体制や機能強化、オペレーション改善等を推進

東京港入港実績



データ分析



- ✓ 東京国際クルーズターミナルの開業後、7.5万総トン以上や15万総トン以上の大型船の寄港は着実に増加
- ✓ 客船規模の大型化や多様化が進んでいることが確認され、それに応じた受入体制の整備・充実が必要

家庭における防災行動実践率の向上に向けた取組の検証

地域防災力の向上（令和6（2024）年度政策評価）

- 目標：2030年度までに家庭における防災行動実践率を90%まで向上させる（2023年度実績：78.6%）
- 取組：防災情報の普及啓発や自主防災組織に対する活動支援など、地域の防災力を向上し、都民の自助・共助の力を高める取組を推進
- 検証：都が推進する取組の利用・参加状況と各防災行動の実践率との関連性を分析

2 群間のデータ比較

【ステップ①】 分析に用いる項目をクロス集計

- ✓ 都の防災関連の取組の利用・参加状況と、防災行動の実践状況をクロス集計

クロス集計イメージ

防災ブックの利用状況



日常備蓄の実践



【ステップ②】 集計結果を比較分析（カイ2乗検定）

- ✓ 各防災行動のクロス集計結果が、偶然でなく防災関連の取組の利用等の状況に関連していることを統計的手法※により確認
- ✓ 防災関連の取組の利用等があるグループとないグループの防災行動実践率を比較



※ 2種類の項目の関連性を調査する際に、実測値の差が抽出の仕方が偏ったことにより偶然生じた結果ではなく、2つの項目間に関連性があることを調べる手法として、カイ2乗検定という統計的手法を利用します。

検証結果

防災ブック『東京くらし防災』

（行動実施率）

	見た（n=4,040）	見ていない（n=10,960）
家族会議	59.0%	32.2%
日常備蓄（3日以上）	76.8%	63.8%
防災マップ確認等	70.1%	36.6%
マイ・タイムライン作成	11.3%	2.2%

防災ブック『東京防災』

	見た（n=4,327）	見ていない（n=10,673）
家族会議	58.8%	31.5%
日常備蓄（3日以上）	77.0%	63.3%
防災マップ確認等	70.0%	35.7%
マイ・タイムライン作成	10.6%	2.2%

『東京都防災アプリ』

	インストールしている（n=1,021）	インストールしていない（n=13,979）
家族会議	74.1%	36.9%
日常備蓄（3日以上）	87.7%	65.8%
防災マップ確認等	85.3%	42.7%
マイ・タイムライン作成	27.3%	3.0%

地域の防災訓練

	参加したことがある（n=2,832）	参加したことがない（n=12,168）
家族会議	71.3%	32.0%
日常備蓄（3日以上）	81.6%	64.0%
防災マップ確認等	73.9%	39.0%
マイ・タイムライン作成	17.3%	1.7%

- ✓ いずれの取組も、利用・参加があるグループの方が各防災行動の実施率が有意に高い結果となった（p値<0.01）。

バリアフリーの推進に係る取組の検証

バリアフリーの推進（令和6（2024）年度政策評価）

- 目標：①心のバリアフリー認知度（2021年度50% ⇒ 2030年度75%）②都道のバリアフリー化（2023年度153km ⇒ 2024年度180km）③都内JR・私鉄駅ホームドア整備率（2023年度 35.9% ⇒ 2028年度：約6割）
- 取組：道路や鉄道のバリアフリー整備に加え、心のバリアフリーや情報アクセス強化などハード・ソフト両面から取組を推進
- 検証：東京のまちにおけるバリアフリー化の状況を都民の側から見た視点で分析

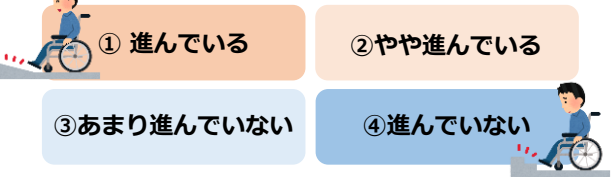
バリアフリー化の状況（年度間比較）

【ステップ①】分析に用いるデータを収集

- ✓ 東京のまちのバリアフリー化の状況を確認するため、H28及びR3に実施した都民向けの調査から、回答を収集

問：東京のまちの印象（施設や設備のバリアフリー化の状況）

H28・R3調査回答



H28とR3の
回答を比較

【ステップ②】回答をD I 化して比較分析

- ✓ 4段階評価での回答を比較するため、回答割合に基づきD I 値※を算出（＝D I 化）
- ✓ 回答者の属性ごとにD I 化を行い、年度間の比較により都民の側から見たバリアフリー化の状況を分析

※ D I（Diffusion Index）値

変化の方向性を示す指標であり、アンケート調査の回答などにおける「良い」「悪い」といった実感を数値化してまとめたもの

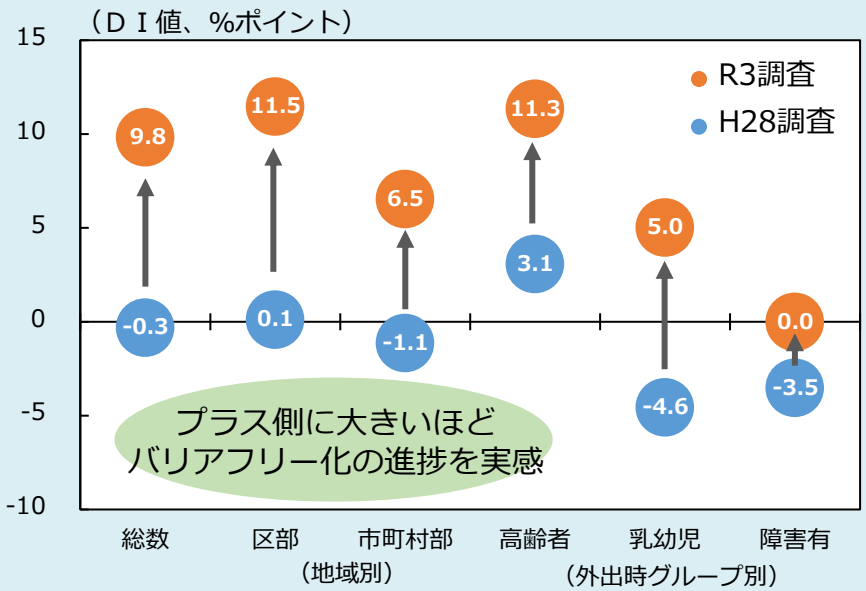
D I 値算出方法

（「①進んでいる」の割合－「④進んでいない」の割合）＋
（「②やや進んでいる」の割合－「③あまり進んでいない」の割合）×1/2

※「その他」及び「無回答」は、本分析の集計上カウントしていない。

検証結果

【バリアフリー化の現状評価（総数、地域・外出時グループ別）】



※ 乳幼児：乳幼児連れグループ、障害有：外出時の障害ありグループ

- ✓ R3調査では、区部や高齢者グループにおいてD I 値が10を超えるなど、全体としてバリアフリー化の進捗を実感
- ✓ H28調査時とR3調査時を比べると、総数及びいずれのグループもD I 値が上昇し、バリアフリー化の状況の改善を実感